# *The Jew of Malta* の愛される悪役たち

渡　邉　晶　子

**要　旨**

*The Jew of Malta* に登場するBarabasが語る言葉は辛辣である。特に彼がクリスチャンに向ける軽蔑の眼差しと非情な言葉の数々は、不快感を通り越して笑いを誘う要素とさえなっている。本作にはBarabasに負けず劣らず卑怯で残酷な人物が次々と登場するのだが、その代表格Ferneze はクリスチャンである。当時の英国における演劇統制を考慮するなら、本作が上演されたこと自体が驚くべきことだが、本稿はその理由をMarlowe作品そのものから見出すことを試みる。醜い争いの陰で大きな影響力を持つ善と悪の力に注目し、本作の魅力に迫りたいと思う。

キーワード：Marlowe、神、演劇統制、悪役、Machevill

## 1．はじめに

Christopher Marlowe の *The Jew of Malta* はおそらく 1589 年から 1591 年の間に執筆されたと考えられ、[1] 1592 年 2 月から 1596 年 6 月にかけて 36 回も Rose 座で上演されていたことを劇場所有者であった Philip Henslowe が *Henslowe's Diary* で伝えている。[2] 特に、Marlowe が 29 歳の若さで殺害された 1 年後にあたる 1594 年、Ruy Lopez の処刑が世間を騒がせたこともあってか、[3] 12 回の上演が記録されており、本作の人気のほどが窺える。中でもこの年、当時のロンドンで人気を二分していたともいえる Rose 座所属の The Lord Admiral's Men と Shakespeare が共同所有する Globe 座所属の The Lord Chamberlain's Men が一緒に本作を上演した点は特筆に値するだろう。[4]

初版は 1633 年で、表紙には "AS IT WAS PLAYD BEFORE THE KING AND QVEENE, IN HIS MAJESTIES" と書かれている。これは 1630 年以降に Queen Henrietta's Men が The Phoenix や Cockpit-in Court で上演した際のことを指していると考えられている。[5] これが他作家による他作品であったならばさほど驚くべきことではないかもしれないが、無神論者との烙印をおされた Marlowe による、[6] クリスチャンとユダヤ人とイスラム教徒によるあからさまな罵り合いが描かれている作品なのである。祝典局（Privy Council）長の事前検閲を受けて許可を得た作品のみが上演できたこの時期に、[7] 本作は上演を止められることもなく、宮廷での上演さえ許されたので

ある。政治的な駆け引きがあった可能性も否定できないが、作品そのもので語られる言葉から、本作がこれほど人々から求められた理由を探っていきたいと思う。

## 2. *The Jew of Malta* と Marlowe

本作はWilliam Shakespeareの*The Merchant of Venice*との比較において語られることが少なくない。[8] 両作品の関係性は題名からも感じられるが、*The Merchant of Venice*は1598年には*The Jew of Venice* という、Marlowe作品により近い題名で出版登録されている。[9] 実際、設定においても、裕福なユダヤ人が自分を迫害するキリスト教徒たちと財産や権利や名誉を巡って争った末に悲惨な結末を迎え、その一人娘は父と決別してキリスト教徒として生きる決意をするなど、類似点は多い。

しかし、本作で登場人物たちが口にする歯に衣着せぬ言葉の応酬は、まさにMarloweならではのものと言えるだろう。互いを「ユダヤ人」「クリスチャン」「トルコ人」と呼び合い、人種や宗教の違いと偏見を盾にして反目し合うのである。地中海の交易の要所に位置していたことから実際にアラブ人やノルマン人によって征服、支配された歴史を持つマルタ島を舞台に、[10] 人間の金銭や権力や異性への滑稽なまでの欲望と身勝手さが、率直な表現ゆえに説得力をもって描かれているのである。本稿では、宗教名は強調されているものの、修道士を含む登場人物の「信仰」という側面が彼らの行動からはほぼ何も描かれていないという点に注目している。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教では旧約聖書に書かれている全能の唯一神を信仰しているはずなのだが、登場人物のほとんどが神への畏れも示されなければ、神への言及すら無いのである。そのような中、ユダヤ人でありながらキリスト教に改宗をするAbigailだけが、神との個人的で内面的な関わりを持ち、信頼してその教えを自らの拠り所としていく姿が目を引く。

信仰心を持つAbigailがむしろ特異な存在のように描かれ、狡いクリスチャンの姿と彼らに向けられる辛辣な言葉が際立つ本作は、「無神論者Marloweの作品」だと理解されがちである。New Mermaids版*The Jew of Malta*のIntroductionが“Contemporaries invoked atheism, disrespect for authority, cruelty, violence and Machiavellian policy in characterizing the man. These terms suggest aspects of Marlowe’s works – cosmic irony, sardonic humour, intellectual aspiration, spectacular violence, impassioned verse and detached analysis – which have won four hundred years of increasingly positive response.”（viii）と説明するように、Marlowe作品には彼自身に向けられる反感と強く結び付けられる傾向があるといえる。

確かに「全能の神」を指し示す言葉を口にする登場人物がいない本作だが、Marloweは前作*Dr Faustus*（1588：Aテキスト）では、神学者でありながら「神」を裏切って悪魔に魂を売り、絶望の淵でキリストの半滴の血に救いを求める主人公Faustusの人生を描いている。時すでに遅

く、彼は滅びる結果を迎えたが、神に背を向けきれなかったその姿は無神論者のものとは大きく異なるだろう。神とは向き合わないBarabasやFernezeとはむしろ対照的である。それぞれがMarloweの意図した人物像であると解釈する以外にも、本作で「神」が語られない理由として当時の検閲の影響が考えられる。なぜなら、Barbara A. MowatがShakespeareの*Othello*に関する研究で明らかにした“God”から“heaven”への言葉の入れ替えと同様の操作が疑われる箇所が本作にも散見されるのである。それが顕著なのは、後に詳述するFernezeが3幕3場で息子の死を悼む祈りの場面と5幕5場で“praise”（5.5.122）との言葉を用いて一連の行動を締めくくる場面である。“God”という明確な対象を表す言葉が相応しいと思われるこれらの場面で“heaven”という曖昧な表現が用いられていることに不自然さを覚える。だが、本作においては結果的にFernezeの信仰そのものが曖昧であることを強調する効果をもたらしているともいえるだろう。

「神」との言葉を用いずとも、MachevillとAbigailが見せる「悪」と「善」の力を効果的に描くことで、口先だけの宗教家や宗教を利用する強欲な権力者たちの姿を浮き彫りにするMarloweの手腕は、彼自身の人生とは切り離して評価すべきだろう。次のセクションからは登場人物の語る言葉から本作の魅力に迫りたい。

## 3. ユダヤ人Barabas

本作はユダヤ人Barabasの言動を中心に物語が進むのだが、彼が本音を吐く頻度の高さは特徴的である。当時の戯曲には、舞台上に聞き手がいない状況で登場人物が語ることで観客が間接的な聞き手となり、ドラマティック・アイロニーを生む独白は多い。[11] しかし、Barabasは他の登場人物には隠しておきたい事柄を観客に直接語りかける。加えて、ほぼ同時に目的を達成するための言葉を近くにいる他の登場人物に向けて発することで、コミカルさを装って観客を自分の側に引き入れるのである。Stephen Greenblattは“Barabas the deceiver gives us his own version of this aesthetic”（215）と、躊躇わず本作の主人公を“deceiver”と呼び、“what matters is that the audience becomes Barabas’s accomplice. And the pact is affirmed over and over again in Barabas’s frequent, malevolently comic asides”（216）と、彼の観客への語り掛けが生む効果の大きさを述べている。[12] だが、圧倒的なまでのBarabasの自己中心性と残虐さによって次々と引き起こされる悲劇は、コミカルという解釈で観客の共感を繋ぎとめることを許さないような深刻さを伴う。実際、Grandfather Filmsが制作した本作の映画は“Marlowe’s dark satire”と紹介され、人々の怒りや悲しみを浮き彫りにし、もの悲しい音楽と重厚な室内装飾や衣装が悲劇の深刻さを強調した作品となっている。

登場するクリスチャンやイスラム教徒たちからは名前よりむしろ“Jew”と呼ばれるBarabasはユダヤ人であることが重要なアイデンティティで、ユダヤ教徒であると考えるのが自然なのだ

が、「信仰」が「神仏などを信じ崇めること」で、「経験や知識を超えた存在を信頼し、自己をゆだねる自覚的な態度」（意味大辞典）や「神仏などを信じてあがめること。また、ある宗教を信じて、その教えを自分のよりどころとすること。」（デジタル大辞泉）であるなら、[12] 彼の言動から「信仰」は見られない。Barabas がいかにも旧約聖書（ユダヤ経典）に書かれているかのように話す内容は、多くがユダヤ人の選民意識を強調した皮肉である。“Thus trowls our fortune in by land and sea, / And thus are we on every side enriched: / These are the blessings promised to the Jews, / And herein was old Abram’s happiness”（1.1.102-5）は、[13] 旧約の時代に神がアブラムに約束された祝福が今自分に及んでいることを感謝しているかのような言葉である。しかし、そのすぐ後で発する “Rather had I a Jew be hated thus, / Than pitied in a Christion poverty”（1.1.113-14）との言葉は、彼の意図が神への感謝などではなく、キリスト教徒たちの清貧を見下すものであることを表している。また、クリスチャンたちに没収された財産の一部を回収したものの、復讐心に燃える Barabas の “swine-eating Christians, / Unchosen nation, never circumcised”（2.3.7-8）との発言からも、自分たちはキリスト教徒とは違って神に選ばれた特別な民族であると強く意識していることがわかる。それでいながら、“I am not of the tribe of Levi, I, / That can so soon forget an injury”（2.3.18-19）とも述べ、イスラエル十二支族の一つで代々祭司を務めて裁判権も有していたレビ族に倣うつもりはないと示唆し、受けた痛みを忘れずに反撃をするとも受け取れる宣言をするのである。

更には “It’s no sin to deceive a Christian”（2.3.308）とさえ言っている。これは宿敵であるクリスチャンのマルタ総督 Ferneze の息子 Lodowick を誑かすようにと娘 Abigail を説き伏せる時に発する言葉だが、その理由として “For they themselves hold it a principle, / Faith is not to be held with heretics; / But all are heretics that are not Jews”（2.3.309-11）と説明する。クリスチャンからすればユダヤ教徒は “heretics” に含まれ、ユダヤ教徒からすればその逆が成り立つという、当然ともいえる論理を都合よく利用した口実である。しかし重要なのは、“Faith is not to be held with heretics” は実際にカトリック教会によって施行されていた教令であった。[14] Abigail は父の言葉に逆らえず、誘われて彼女に夢中になった Lodowick と彼女が愛する Mathias は Barabas の偽の手紙に騙されて決闘の末に共に果ててしまうのである。Barabas にとってユダヤ人であるということは、異教徒であるクリスチャンを蔑んでも構わないということを意味しているといえるのである。

Barabas は不信心なだけでなく、非常に自分勝手な人物である。トルコの艦隊が武装してマルタにやってきて、戦争が起こりそうだとユダヤ人の同胞から伝えられると、“Nay, let’em combat, conquer, and kill all, / So they spare me, my daughter, and my wealth”（1.1.151-2）と呟くのである。冗談としか思えないほど極端に利己的な言葉だが、これが本心であったことは後の彼の言動から明らかになる。ユダヤ教の教えを真摯に受け止めようとはせず、財産に執着し、身近な人さえ何

の躊躇いもなく次々と殺すその姿は、悪役の“stage Jew”というだけでは納得できない、何か人ならぬものを感じさせる迫力を備えているといえるだろう。

## 4. Villain vs. Villain vs. Villain

ユダヤ人Barabasが悪役（villain）なら、[15] 敵役のクリスチャンたちは善き人々なのかというと本作においては明らかに違う。Barabasは類を見ないほどの冷血、非道な極悪人となるのだが、そもそも権力を乱用して言葉巧みに彼の財産を奪い、絶望の淵に追いやったのはクリスチャンのマルタ総督Ferneze である。この人物のあくどさもまた比肩するものはないほどで、5幕では利用される振りをしてBarabasをまんまと騙して殺害し、マルタ総督の地位を奪い返し、トルコとの交渉に利用するためにトルコ皇帝の息子Calymathを捕虜にするということをやってのける。

悪役はこの二人だけではない。Barabasが殺人計画に利用するために手に入れた奴隷のIthamoreは、嬉々として殺人幇助を繰り返す。Barabasは奴隷市場で役人に“I must have one that’s sickly, and’t be but / for sparing vittles”（2.3.123-24）、“let me see one that’s somewhat leaner”（2.3.125）と風変わりな注文をつけ、勧められた痩せた男に生まれを聞く。そして、“In Thrace; brought up in Arabia”（2.3.128）との答えに満足をしてIthamoreを買うのである。トラキア人は「戦闘に秀で，古代ローマ時代にも傭兵として重用された」とされる。[16] 15世紀にローマの属州からトルコ領となった地で生まれ、アラビアで育ったというIthamoreにイスラム教の影響と反キリスト教の意識、更には痩せて不健康そうな様子から強い不満や欲求があることなどをBarabasは嗅ぎ取ったとも考えられる。

奴隷市場を出て間もなく、Barabasは知り合ったばかりのIthamoreに自らの過去を打ち明けるのだが、それは人々の憧れである貿易商として成功を収めた大富豪、厳しい戒律に従って生きるユダヤ人という人物像からは想像できないような行為の告白である。いかに極悪非道の限りを尽くしてクリスチャンたちを苦しめ、殺し、財をなしてきたかを27行に渡って自慢げに語るのである。これから実行に移す復讐にどれだけIthamoreが共感するかを試しているかのようでもある。それを聞いたIthamoreも、自らがいかにクリスチャンたちを苦しめ、それを楽しんできたかを得意げに語る。それを聞いたBarabasの台詞が以下の通りである。

> BARABAS. Why this is something: make account of me
> As of thy fellow; we are villains both:
> Both circumcised, we hate Christians both:
> Be true and secret, thou shalt want no gold.（2.3.212-15）

213 行目と 214 行目に合わせて 3 回繰り返される “both” が、悪事を働くことに躊躇いが無いのみならず、喜びすら覚える感覚を共有できる相手を手に入れたBarabasの喜びを表しているといえるだろう。Ithamoreの語った悪事の数々が主人を喜ばすための作り話だけではないことは、Barabasが娘や修道士たちを殺すのを面白半分に手伝い、挙句の果てに金欲しさで主人を売るあくどさからは想像に難くない。Barabasから遺産を与えるとまで約束されたが、Ithamoreは “To undo a Jew is charity, and not sin”（4.4.76）とさえ言って彼を裏切り、逆に毒殺されてしまう。

イスラム教徒Calymathはというと、父親であるトルコの皇帝に代わって未払いの年貢 10 年分を一度に払うことをマルタに要求し、FernezeがBarabasの財産を没収するきっかけを作った人物である。しかし、知恵者とはいえず、身勝手で残忍なBarabasやFernezeにいとも簡単に振り回される。自分が総督に任命したBarabasが解任したはずのFernezeに嵌められて死んだ直後には “Tell me, you Christians, what doth this portend?”（5.5.89）と聞いており、Barabasの策により自国の兵士たちが皆殺しにされ、自身がFernezeの捕虜とされたことにも気づかない。知らされてもなお、“Nay rather, Christians, let me go to Turkey, / In person there to meditate your peace; / To keep me here will nought advantage you”（5.5.114-16）と提案するなど、BarabasとFernezeの謀略や変り身の早さに理解が追い付かない様子を見せる。しかし、父親の権勢を笠に着て取引をしようとする狡さは常に持ち合わせている。

宗教間の争いのような言葉が飛び交う本作だが、宗教は果たしてどのように扱われているのかを改めて考えてみたい。BarabasもFernezeも、時に信仰者が喜ぶような表現を用いるが、彼らの発言は信仰心と結び付いているとは考えにくい。Barabasの選民意識とキリスト教徒に対して抱く思いについては既に述べてきたが、ここでは自らを宗教的知識に富んだ人物であるかのように口にする彼の言葉に注目したい。James R. Siemonも “Barabas’s use of familiar biblical or classical sources is pointedly ironic or inaccurate”（74）と指摘するように、彼の言葉の中には明らかに不正確なものもある。Abigailがキリスト教徒になったと聞いたBarabasは怒り、絶縁を誓うと “But perish underneath my bitter curse/ Like Cain by Adam, for his brother’s death.”（3.4.32-33）と述べる。確かに創世記 4 章でアダムとイブの息子カインは嫉妬から弟アベルを殺してしまうのだが、この件に直接関わるアダムの言動は聖書には書かれていない。神の怒りを受けたカインは土地を追われはするが、神から受けた特別な保護によって生き延び、子孫は 6 代まで聖書に名が記されている。したがって、Barabasの言う「父親の激しい呪い」にも、それを神が認めたかのような解釈にも根拠はない。それにも関わらず、Barabasは自らの言葉を正当な理由として娘を殺すのである。このように深刻な局面で聖書の内容さえ勝手に変えるBarabasの宗教観は相当ご都合主義なものだといえるだろう。

一方、息子Lodowickを失ったFernezeは、息子と彼の恋敵を墓に葬るように命じると “Upon which altar I will offer up / My daily sacrifice of sighs and tears, / And with my prayers pierce

impartial heavens”（3.2.31-33）と語る。敢えて“heavens”を「冷淡」と非難し、いかにも「わが祈りを聞き届け、やがて情を示してくれる神」への信仰心を示すかのような表現だが、“Till they［reveal］the causers of our smarts, / Which forced their hands divide united hearts”（3.2.34-35）と続く言葉は、息子たちの死を悼んで神の前に謙っているというよりは、息子を死なせて自分を苦しめた犯人への強い憤りを耳障りの良い言葉で覆い隠しているようにも聞こえる。実際Ferneze は、Lodowick の死は自分が仕組んだことだと Barabas が白状しても、ただ彼の死を見届けるだけで、息子について一言も発することはない。彼にとっての宗教も形式的なものに過ぎないといえるだろう。

Barabas や Ferneze が互いに向ける言葉に狡猾に隠す悪意と、時に素っ気なく示される残忍な本心は、宗教や人種を超えて人間が皆持つ身勝手さや残酷さであるともいえるだろう。しかし、本作において注目すべきは Machevill の存在である。宮廷での上演に際して語られたプロローグとエピローグとは別に、本作には上演と同時に始まるプロローグがある。そこに登場するのが Machevill である。彼は 35 行にも及ぶスピーチを終えると退場し、その後は直接言及されることも、再登場することもない。既に死んで自由な魂として語る彼は、人間も人間の言葉も悪も死も恐れず、“I count religion but a childish toy, / And hold there is no sin but ignorance.”（14-15）と言い切る。まさに大胆不敵である。そしてこれこそが、本作に登場する悪役たちに見られる宗教を軽んじた態度ではないか。

Machevill は、自らと自らの信条について語った後、“a Jew, / Who smiles to see how full his bags are crammed, / Which money was not got without my means”（30-32）と Barabas を紹介し、彼の悲劇を見せるためにブリテンに来たと告げる。そして、“I crave but this, grace him as he deserves, / And let him not be entertained the worse / Because he favours me.”（33-35）と、自らの思想と Barabas との強い関連性を示唆する。Barabas も“I learned in Florence how to kiss my hand, /Heave up my shoulders when they call me dog, / And duck as low as any bare-foot friar, / Hoping to see them starve upon a stall”（2.3.23-26）と語り、謙って見せて心の中で修道士たちが飢え死にするのを願うといった価値観は Machevill の活動の中心地であった Florence で身につけたと認める。それだけでなく、欲と恨みに駆られた者同士が壮絶な騙し合いを繰り広げることにも、「みな自らの意志で死ぬことに敬意を払い、中には、死者の魂が滅することなく生存中よりも一層祝福されると信じるものもいた」といわれるトラキアの出身である Ithamore を Barabas が奴隷としたことにも、[17] 霊魂となった Machevill の影を感じ取ることができないだろうか。プロローグで彼が語った不吉な思いは、広く作品全体に影響を与えていると考えられるのである。

## 5. 娘の死と父の死

本作の中にも唯一、自らの信仰について真剣に語る人物はいるのだが、それがBarabasの娘Abigailである。ユダヤ教徒として生まれ育ったものの、様々な苦難を経験する中でキリスト教に出会い、信仰を確かなものにし、死に際までそれを守り続けるのである。彼女の心の変化には明らかに父親の言動が関係している。物語序盤では、Ferneze に全財産を没収されて "Daughter, I have it: thou perceiv'st the plight / Wherein these Christians have oppressed me: / Be ruled by me, for it extremity / We ought to make bar of no policy"（1.2.270-73）と語りかける年老いた父親に "Father, whate'er it be to injure them / That have so manifestly wronged us, / What will not Abigail attempt?"（1.2.274-76）と強い口調で答える。恐らく彼女は父親がどれほどの怒りや復讐心を秘めているかを知らず、どれほど残虐になりうるのか想像すらできなかったことだろう。なぜなら、計画的で論理的で弁が立つBarabasは、自らは知的で敬虔な人物であるという印象を娘に与えるような発言を繰り返しているのである。実際彼はこの絶望的な状況の中でも、泣く必要はないと諭し、彼女のためにも十分蓄えてきていると告げる冷静さを見せる。Abigailは父の命令に従い、偽りのキリスト教信仰を口にして修道院に潜り込むと、父の隠し財産を密かに回収して、さっさと自宅に戻る。実の父親に、悪の道に引き込まれているとは気づいていないだろう。

しかし、父が自分を利用してLodowickとMathiasを死に追いやったことを知ると、改めて修道院に受け入れてとしてほしいと修道士に願う。修道院の生活を嫌ったのはつい最近のことではないかと問う修道士に、彼女はキリスト教の悔い改めの告白をする。

ABIGAIL. Then were my thoughts so frail and unconfirmed,
And I was chained to follies of the world: 60
But now experience, purchased with grief,
Has made me see the difference of things.
My sinful soul, alas, hath paced too long
The fatal labyrinth of misbelief,
Far from the Son that gives eternal life.（3.3.59-65）

63 行目に "My sinful soul" とあるが、本作において自分の「罪」について言及するのは、聖職者たちでも金や権力の亡者となった人殺したちでもなく、Abigailだけである。また65行目にある"the Son" は明らかにイエス・キリストを指す言葉で、"God" が使われない本作において、このただ一度だけ用いられる "the Son" が永遠の命を与える存在として語られている。Marloweはこの一文でAbigailのキリスト教信仰を明確にしているといえるのである。

娘の改宗に腹を立てたBarabasは彼女を殺す決意をし、修道院に寄付をする料理に毒を盛る。料理を食べた他の修道女たちが次々と死んでいく中、Abigailは間もなく自分にも訪れる死を悟り、修道士Bernardineに最期の言葉を託す。

ABIGAIL. Be you my ghostly father; and first know,
That in this house I lived religiously,
Chaste and devout, much sorrowing of my sins,
But ere I came— 15
BERNARDINE. What then?
ABIGAIL. I did offend high heaven so grievously,
As I am almost desperate for my sins:
And one offence torments me more than all.（3.6.12-19）

この臨終の言葉の中でも、彼女は14行目と18行目で“my sins”と口にする。そして、赦されざるほど重大で、彼女を苦しめてきた“one offence”（3.6.19）がMathiasとLodowickの死に関わることで、自らが関与したことをこの後に告白するのである。17行目で用いられている“high heaven”との表現にも注目したい。[18]彼女の思いは創造主である神“God”に向けられているため、漠然とした空間にすぎない“heaven”に“high”を付けることで、天国における「神の臨在」を強調することを意図したと考えられるだろう。

彼女の信仰は、父親の犯した罪を紙に書いて修道士に渡し、秘密を守ってくれるよう懇願した後に更に強く表れる。“Convert my father that he may be saved, / And witness that I die a Christian”（3.6.39-40）と言って息を引き取るのである。死を恐れて自らの心の安寧を祈ってほしいと願うのではなく、赦し難い悪事に手を染めた父親がキリスト教の神を信じて魂の救済を受けることができるように導いてほしいと願って死ぬのである。父親から毒を盛られたことには気づいていなかったとしても、やや出来過ぎた展開と言えなくもないが、David K. Andersonが“Abigail's choice to enter a papist institution may be perceived as questionable, but it is difficult to doubt the sincerity of the dying girl's faith as she declares, [lines 13-14]”（92）と述べるように、この告解は彼女の飾らない本心と捉えるべきだろう。このような信仰の姿が、強大な悪の力に対抗しうる善の力として本作には描かれているのではないだろうか。

また本稿では、彼女の言葉が“Christian”で終わっていることは意味深いと考える。“God”とや“Jesus”といった言葉を用いることができないとしたなら、これは迫りくる死を前に彼女が神との繋がりを明確に表現することのできる唯一の言葉だといえるからである。同時に、ユダヤ人として生まれたAbigailが最期にクリスチャンを名乗ることは、自らの罪に気づいてからは悔

い改めて、信仰者として生きたことを強調する。都合よく宗教を振りかざす他の登場人物たちとの違いを浮き彫りにするものといえるだろう。更に、Abigailが信仰心から口にする“Christian”は、終幕においてBarabasとCalymathの口から何度も発せられる空虚な“Christians”という言葉と大きな対比をなすものともいえるだろう。

ここで、彼女を毒殺した父Barabasの死に様がどのようなものだったのか見ていきたい。Fernezeの罠に嵌り、予期せず燃え滾る大釜に落ち込んだ直後、Barabasは以下のように助けを求める。

BARABAS. Help, help me, Christians, help.
FERNEZE. See Calymath, this was devised for thee. 65
CALYMATH. Treason, treason Bashaws, fly.
FERNEZE. No, Selim, do not fly;
See his end first, and fly then if thou canst.
BARBAS. Oh help me, Selim, help me Christians.
Governor, why stand you all so pitiless? (5.5.64-70)

燃え滾る釜の中に落とされたBarabasが、想定外の状況に動揺し、おそらくなぜ自分が罠に嵌ったかもわからずに、まず助けを求める相手は“Christians”なのである。彼らは自分を陥れた憎むべき存在ではあったが、Ferneze失脚後にはマルタの総督に任ぜられていたBarabasにとっては部下でもあった。しかし、これまで散々自分たちを騙し、この場においてはCalymathをも騙そうとしていたBarabasを救出しようと動く者はいない。冷ややかに“Accused Barabas, base Jew”(5.5.72)と言い返すFernezeに“You will not help me then ?”とBarabasは問いかけるが、“No, villain, no”(5.5.75)と即座に返される。Fernezeを含め“Christians”はBarabasを見殺しにすることに迷いはないのである。その様子を見ていたCalymathは動揺し、“Tell me, you Christians, what doth this portend?”(5.5.89)と周囲のクリスチャンたちに問いかける。この時点で、“Christians”はマルタの人々であると同時に、Barabasを見殺しにする人々を意味するのである。

Barabasは状況を理解して死を覚悟する。ここには友はもちろん、彼に同情する一人もいないのである。しかし彼は、これまでの過ちを悔やむどころか、目の前の人々を呪い始める。Fernezeに対しては、自分がお前の息子を殺したのだと自供し、Calymathには、お供のお偉方共々皆殺しにする計画だったことを告げる。自分がいかに優れた悪人かを誇ったつもりかもしれない。しかし、何の反応も返ってこないことに腹を立て、Barabasは言葉を続ける。

BARABAS. Damned Christians, dogs, and Turkish infidels; 85

But now begins the extremity of heat
To pinch me with intolerable pangs:
Die life, fly soul, tongue curse thy fill and die!（5.5.85-88）　　［Dies］

これが彼の人生最期の言葉となる。Barabasには反省も後悔も恐れも無く、自分が陥れた人々を堂々と呪い、最期には自らを呪って死ぬのである。人としての感情を持たない、人間味を完全に失った、壮絶なものといえるだろう。皮肉なことに、ユダヤ人Barabasの心に「助け主」であるはずの神は浮かばないのである。

一方、Barabasを見殺しにした連中の捕虜にされるとわかったCalymathは“Nay rather, Christinas, let me go to Turkey”と、“Christians”に助けを求めるが、Ferneze はにべもなく“Content thee, Calymath, here thou must stay, / And live in Malta prisoner”（5.5.17-18）と告げる。そして、“So march away, and let due praise be given / Neither to fate nor fortune, but to heaven”（5.5.122-23）との彼の言葉で終幕となるのである。当時の観客はこの結末をクリスチャンの勝利と受け取ったとも考えられる。確かにこれは「神に栄光を」との祈りとも思える表現だが、Abigail の最期の言葉と比べると、痛烈な皮肉にも聞こえないだろうか。領土と主権を守るためとはいえ、思い遣りや親切心の欠片も見せずに淡々と人を欺き、Barabasを殺し、Christianとしての敬虔さも悔い改めも全く示さないFernezeが、最後に口にする言葉が“heaven”で、本来“God”であったと考えられる言葉なのである。[19)]

## 6. おわりに

*The Jew of Malta* は、ユダヤ人Barabasを中心に人々の生き様と死に様とが描かれた作品だといえるだろう。この時代、作品に描かれるユダヤ人といえば強欲で身勝手で残酷な悪役という人物像が一般的だったが、本作に登場するそのような悪役はBarabasだけではない。「クリスチャン」「イスラム教徒」と呼ばれる人々も、互いを見下し、欲望を満たすためなら躊躇わず卑怯であくどい道を選ぶのである。宗教家や信仰心に篤いはずの人々は「神」とさえ口にせず、クリスチャンも美化されることなく人としての醜さを露にする。登場人物のほぼ全員が身勝手で残酷な行動に走る本作は、本来ならば衝撃的で、不道徳と受け取られるのが自然だろう。戯曲への検閲の厳しかった時代になぜ本作をロンドンで何度も上演することができたのかとの疑問を抱き、本稿では、その理由を作品そのものの中に探ることを試みた。登場人物が語る言葉に注目をし、発話の意図を分析することにより、本作が人々に広く求められた理由に迫った。

まず、本作に顕著に見られる悪の力に対し、Abigailが善き選択をする人物の象徴的存在として描かれている点を大きな特徴として論じた。富豪のユダヤ人を父に持つ若い娘がキリスト教に

改宗し、自分を利用して愛する人とその友を死なせた父を赦すのである。更には、恐ろしい罪を重ねた父の救いを願って死ぬという、キリスト教徒の立場から見たら理想的ともいえる美しい物語が挿入され、作品全体にバランスを生み出していると考えられるのである。

更に、悪の象徴をユダヤ人Barabasでも、クリスチャンのFernezeでも、トルコの皇太子やトラキア出身のIthamoreでもなく、プロローグで登場した既に死んだはずのMachevillの霊としたことが重要であることを論じた。神も人も恐れぬ思想を披露した上で、自分に似たBarabasを相応に扱ってくれとMachevillが観客に頼むことで物語は始まっている。これにより、Barabasが躊躇いも無く発する辛辣な言葉の数々も、大胆な二枚舌も、命を軽んじる悪事も全て、既に人間ではないMachevillの仕業であるかのような印象を与えることが意図されていると本稿では考えた。それだけではなく、Barabasに負けず劣らずの悪事を繰り広げるFernezeの言動にも、Machevillがプロローグで語った言葉が重ねられる点にも言及した。もともと冷淡なFernezeだが、大釜の中で助けを求めるBarabasに対する言動に人間味は全く感じられない。Barabasの叫びを無視してCalymathに冷静に“See his end first, and fly then if thou canst”（5.5.68）と告げるのである。これは「逃げようなどと考えると、おまえも悶え苦しみながら死んでいくことになるぞ」と脅していることに他ならない。Calymathをトルコ国王から譲歩を引き出す道具としてしか見ていないのが明らかである。自らも息子を殺される痛みを味わったばかりのFernezeがここまで非情でいられるのは、Machevillの力が及んでいるからだと考えるならば、理解できないこともないだろう。そして、Machevillの霊魂はBarabasが悪態をついて死んでいくのをただ傍観していたのではなく、その命が消える瞬間にFernezeに乗り移っていた、若しくは、FernezeにBarabasを超える悪の資質を発見し、とうに乗り換えていたと考えれば、Fernezeの冷徹さも不思議ではないだろう。Machevillの影響は作品全体に及んでいて、「悪いのはMachevillの霊」といえる作品に仕上げられていると考えられるのである。

以上のように、欲深いクリスチャンが騙されて殺される場面があっても、そのような悪に打ち勝つほどの善き信仰の姿が描かれ、また悪の根源は人ではないというメッセージに包まれた本作は、検閲で咎められることもなかったのではないかと考えられる。[20] また、国家政策としての宗教改革に翻弄されていた当時の観客は、敵役であるユダヤ人が歯に衣着せぬ言葉で修道院や偽善的聖職者たちを非難する様子や、宗教を口先だけで語る人々の醜さ、滑稽さを面白がって観ていたと考えることも想像に難くないだろう。

**注**

1）所説あるが、Catherine Clifford と Martin Wigginsは‘A Chronology of Marlowe’s life and works’で1589年としている（xv）（xxiii）。Marloweが執筆において参考としたと考えられる資料はVivien ThomasとWilliam Tydemanによって9点挙げられているが、これこそが種本といえる作品の存在は確

認されていない。

2）初演の記録（p.16）は 1591 年とあるが、近年の研究では 1592 年 2 月からと考えられている。 James R. Siemon の Introduction（ix）参照。6 月 13 日、6 月 23 日、7 月 10 日、12 月 9 日の上演タイトルは “The Jew（e）” としか記されていないが、Henslowe による省略と考えられる 。

3）ポルトガル出身のユダヤ系の医師。キリスト教徒でエリザベス一世の医長であったが、女王の毒殺を図ったとして 1594 年に裁判が行われ、同年死刑に処せられた。M. M. Mahood（p.7）参照。

4）Henslowe（p.21）、及び Clifford と Wiggins（xxiii）参照。

5）Clifford と Wiggins（xxiii）、及び Sara Munson Deats（pp.28, 29）参照。

6）Robert Greene の言葉、Richard Baines と Thomas Kyd による枢密院への報告により、Marlowe は「無神論者」で「同性愛者」だったとされている。 彼は “Baines Note”（Park Honan pp. 374, 375）が書かれた 4 日後に殺害されたと考えられる。

7）太田一昭（pp. 4,5）参照。

8）*The Merchant of Venice* の Oxford 版（Jay L. Halio 1993）、Arden 版（John Drakakis 2010）、Cambridge 版（Mahood 2003）の編集者はそれぞれ Introduction で詳細な比較を行っている。David Ian Hopp は *The Merchant of Venice* の種本の一つとして、“Christopher Marlowe’s *Jew of Malta*” を書いているが、Mahood は “*The Jew of Malta* is not, in the conventional sense, a source of *The Merchant of Venice*. It is a persistent presence, which Shakespeare manipulates with confident skill.”（8）と述べている。

9）*The Norton Shakespeare* の Textual Note（p. 1119）参照。

10）870 年にアラブ人の侵攻を受けてイスラム帝国の支配下に置かれ、1127 年にはノルマン人が占拠した。1130年 シチリア王国、1479年にはスペインの支配下に置かれ、1530年にマルタ騎士団の所領となった。1565 年にオスマン帝国に包囲されるが 4 か月ほどで撃退に成功したことと本作との関わりについては Siemon（ix）参照。

11）Faustus（Scene 13 59-112）、Prospero（*The Tempest* 5.1.33-57）、Shylock（*The Merchant of Venice* 1.3.33-44）の独白など。他の登場人物が舞台上にいないか、聞こえていないという設定で、心の声として語られている。

12）意味大辞典 https://imijiten.net/%E4%BF%A1%E4%BB%B0
デジタル大辞泉 https://dictionary.goo.ne.jp/word/%E4%BF%A1%E4%BB%B0/

13）本稿中の本作からの台詞は James R. Siemon 編の *The Jew of Malta* より引用。

14）1414 年のコンスタンツ公会議で、カトリック教会の大分裂を防ぐ目的で発せられた命令だが、プロテスタント運動の先駆者 Jan Hus は異端であると断罪されて火刑に処せられた。無神論者との嫌疑をかけられていた Marlowe がこの一文を Barabas に言わせたのには特別な思いがあったかもしれない。

15）本稿では “Villain” を次のように捉えている。“（in a film, novel, or play）a character whose evil actions or motives are important to the plot”（*Oxford Languages*）、“a character in a book, play, film, etc. who harms other people”（*Cambridge Dictionary*）

16）ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典 https://kotobank.jp/word/%E3%81%A8%E3%82%89%E3%81%8D%E3%81%82%E4%BA%BA-3183909

17）Diana Gergova 著、松田陽 訳「トラキア人と魂の不滅：古代トラキアにおける墓、儀式、信仰」

https://umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DPastExh/Publish_db/2000Afterlife/04/0401.html

18) 語源は不明で、Marlowe が作った表現である可能性もある。Shakespeare も *Venus and Adonis*（1592-3），*Measure for Measure*（1603），*All's Well that Ends Well*（1604-5）で用いているが、いずれも本作より後に執筆されている。

19) 小田島雄志はこの最後の "heaven" だけは「天」ではなく、「神」と訳している。文脈を考慮すると、「天」では曖昧過ぎて意味をなさない部分があることがわかる。

20) 様々な外的要因が働いたであろうことは多くの研究者が指摘している。Richard Dutton は "It is entirely possible, however, that Marlowe himself was only marginal to the Privy Council's anxiety: that they were most concerned about the anti-immigrant propaganda, an inflammatory issue with immediate public order implications, which seems to have been Edmund Tilney's first concern over *Sir Thomas More*."（pp.26,27）と、当時の検閲者に削除や修正命令が描き込まれた Anthony Munday（1560? – 1 1633）他による作品ほどは問題にされなかった理由を説明し、太田一昭は「この時代、アングリカン体制を否定する演劇の上演は許されなかったが、宗教的な主題を扱うことはタブーではなかった」(p.4) と説明し、Marlowe 作品は上演が認められないということはなかったようだと述べている。

**参考文献・資料**


Acheson, Arthur. *Shakespeare's Lost Years in London 1586-1592*. 1920. https://gutenberg.org/cache/epub/24500/pg24500-images.html

Anderson, David K. "The Theater of the Damned: Religion and the Audience in the Tragedy of Christopher Marlowe." *Texas Studies in Literature and Language*, Volume 54. Texas: U of Texas P, 2012, 79-109. Print.

Clifford, Catherine and Martin Wiggins. "A Chronology of Marlowe's life and works." *Christopher Marlowe in Context*. Ed. Emily C. Bartels and Emma Smith. Cambridge: Cambridge UP, 2015, xv-xxvii. Print.

Deats, Sara Munson. "The Performance History." *The Jew of Malta: A Critical Reader*. Ed. Robert A. Logan. London: Bloomsbury, 2013, 27-52. Print.

Dutton, Richard. "Shakespeare and Marlowe: Censorship and Construction." *The Yearbook of English Studies*, Vol. 23, Early Shakespeare Special Number. 1993, 1-29. https://www.jstor.org/stable/3507970?read-now=1&seq=1#page_scan_tab_contents

Greenblatt, Stephen. *Renaissance Self-Fashioning: From More to Shakespeare*. Chicago: U of Chicago P., 1980, 193-221. Print.

Henslowe, Philip. *Henslowe's Diary*. Ed. R. A. Foakes and R. T. Rickert. Cambridge: Cambridge UP, 1961. Print.

Honan, Park. *Christopher Marlowe: Poet & Spy*. Oxford: Oxford UP, 2005. Print.

Hopp, David Ian. *I Never did Repent for Doing Good: A Companion to Shakespeare's The Merchant of Venice*. Charleston: BookSurge, 2009, 136-47. Print.

Ide, Arata. *Localizing Christopher Marlowe: His Life, Plays and Mythology, 1575-1593*. Suffolk: D. S. Brewer, 2023. Print.

Mahood, M. M. "Introduction." *The Merchant of Venice*. Cambridge: Cambridge UP, 1987. Print. 1-8. Print.

Marlowe. Christopher. *Dr Faustus*. Ed. Roma Gill. London: A & C Black, 1989. Print.

- - - , *The Jew of Malta.* Ed. James R. Siemon. London: A & C Black, 2009. Print.

"The Merchant of Venice." *The Norton Shakespeare Based on the Oxford Edition*. 2nd ed. Ed. Stephen Greenblatt, et al. New York: Norton, 2008, 1111-20. Print.

Mowat, Barbara A. "Q2 Othello and the 1606 'Acte to restraine Abuses of Players.'" *Varianten - Variants – Variantes.* Ed. Christa Jansohn and Bodo Plachta. Tübingen: Max Niemeyer Verlag, 2005, 91-106. Print.

Thomas, Vivien and William Tydeman, eds. *Christopher Marlowe: The Plays and Their Sources*. New York: Routledge, 1994. Print.

太田一昭『英国ルネサンス演劇統制史：検閲と庇護』九州大学出版会。2012 年。

クリストファー・マーロー『エリザベス朝演劇集Ⅰ　マルタ島のユダヤ人　フォースタス博士』小田島雄志訳　白水社。1995 年。5-141 頁。

*Christopher Marlowe's The Jew of Malta.* Dir. Douglas Morse. Grandfather Films. 2012. DVD